

中する傾向がある。

甲府駅43街区の調査（山梨県教委ほか 2004）では素掘タイプ、井戸桶を伴うタイプ、石積みを伴うタイプの3大別がなされている。時期的には中世に遡る可能性があるものとして石積みを伴うタイプ、17世紀末～18世紀初頭のものとして素掘りタイプ、18世紀～19世紀および明治期のものとして井戸桶タイプの事例が知られるという。石積みタイプにも上層のみのもの、中位までおよぶもの、本遺跡1号井戸のように1段のみ石積みとするものなどの諸例が存在する。また井戸桶タイプにも時期的、城内、城下町などの場の差による構造の違いが知られている。今後、事例を集め、検討して井戸変遷を明らかにする必要性があるだろう。

7号土坑については機能、性格がよくわからない不明遺構である。円筒形で中心に丸い穴をもつ点が特徴で、上層が礫敷きのようになり、茶臼の上臼のみが完存して遺存してた。規模としては井戸に近いが、桶状の木製品を埋め込んだ埋め桶の一種かもしれない。

近世に遡ると考えられる遺物のなかで注目される遺物に土馬がある。鞍を着けない裸馬であるが、県内でかつて行った集成では、金峰山採集品をはじめ数例があり、胎土から平安時代の可能性も想定された。しかしそ後の調査で中～近世段階の資料が見つかり、近世まで下る事例があることが判明している。

また20号土坑から集中的に鋳型状土製品、トチン類が出土した点にも注目しておきたい。20号土坑は長さ1.6mの小形土坑である（第10図参照）。近世に遡ると考えられる遺構で、鍋の把手部分の鋳型とみられる土製品多数とともに、鍋の内外の鋳型らしき被熱粘土塊多数や大小のトチンが存在することから（図版12・15参照）、鉄鍋製作に関する廃棄土坑とみられる。この種の遺物は製作地から遠くまで移動する性格ではないことから、近くに工房的な施設があったことが想定でき、3号建物跡が関連施設であった可能性を考えてよかろう。鋳造遺構は未検出であるが、調査区南東の隣地に金山神社が存在し、古絵図の検討によれば1849年以降、1918年ま

での間に創建されたとみられる。金山神社は鋳物師が祀った祭神といえることから、遅くとも近世末、甲府城下町の外縁に鉄鍋を主とする製作工房が存在したことがわかる。

なお、鉄鍋把手鋳型の類例として、管見では新潟県上越市の大内城下鍋屋町遺跡出土品がある（渡辺2003）。大内城下町の北のはずれにあり、地名が示すように鉄鍋を主とした鋳物師町で、出土遺物から鉄鍋のほか、梵鐘、半鐘を製作したことがわかる。そこでは18世紀末～19世紀前半の遺構に伴って鍋把手（耳）鋳型が出土し、鋳型には鋳物師の山岸氏を示す「山」の陽刻がある。また三叉トチン（三叉状土製品）があり、「鋳型を乾燥させる時に焼き炭を乗せる台として使用されるもので、二次被熱がみられる」という（図5）。本遺跡の年代観を探るうえで参考としたい。

2期の遺構群は1・2号建物跡、1・2号溝、4号井戸を主な遺構とする。調査区中央に左右に区画する2号溝が南北に走り、その西側に礎石列および根石群からなる民家と思われる建物跡1棟が存在する。礎石は東側の残りが良く、大部分は根石のみという状況であった。建物は東西4間×南北4間以上で、西および北側に縁をもつらしい。調査区南壁にかかる部分にも根石状の集石が見えるので、南側にさらに建物が続くらしい。北側には長方形のセメントの枠があり、さらに西側にコ状の栗石がある。枠の脇には部分的なレンガ敷きがあり、炊事場、あるいは風呂場の可能性がある。土間状の硬化面をはさんで屋外には4号井戸がある。さらに東側には、井戸脇あたりから北へ向って土管列、石組みでできた水路があり、排水を2号溝から1号溝を経て二の堀方向へ誘導している。

二の堀寄りにある2号建物跡は、床にセメントを打ち放った倉庫的な建物である。コンクリートの基礎から立ち上がったアンカーボルトが、いずれも西側に強く曲がっていて、建物が西側に倒壊したような状況を示し、さらに床が赤黒に被熱していたのが印象的であった。そのほか1号土坑、24号ピット、16号土坑などがあり、16号土坑からは戦災時の植木鉢、皿などと共に杉の葉が多量に出土していて、戦災前後の何らかの状況を示している。

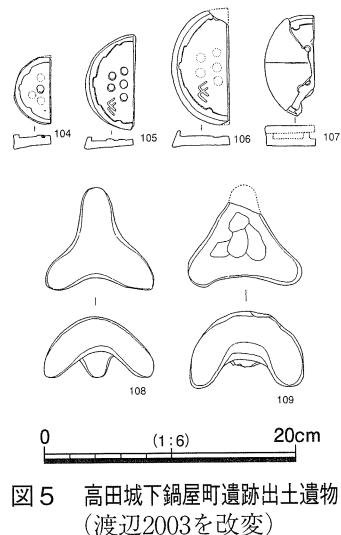


図5 高田城下鍋屋町遺跡出土遺物
(渡辺2003を改変)

第2節 戦災廃棄物について

調査区内のほぼ全域には、太平洋戦争末期の昭和20年（1945）7月6・7日に米軍により行われた甲府空襲後の多量の廃棄物が埋め土として堆積しているの

が本遺跡の最大の特徴であり、特筆すべき調査成果となつた。

甲府空襲は7月6日深夜11時23分頃から翌日1時45分頃まで行われ、市街地の74%を焼失し、死者、行方不明者775名に及んだという。

空襲の復興については、『甲府市制六十年誌』(甲府市役所 1949)、『甲府市史 通史編 第4巻 現代』に詳しい。それによれば空襲直後の7月17日には軍隊・学徒・義勇隊の応援を得て鉄屑類の回収が始まられ、終戦後も整理事業としての瓦礫清掃、鉄屑等の金属回収作業が継続的に行われた。復興整理には戦災直後から甲府市の土木課があたったが、機構としては8月、県に外局として戦災復興部が、9月26日に甲府市に戦災復興局が設置され、7部のうち土木部が清掃整地などを担当した。土木部には經理・整地・工事の3係が置かれ、昭和21年3月には復興局土木部員2名を採用、同年8月および10月には臨時事務員20名を採用し、本格的に着手した。昭和22年1月からは工事係内に清掃整理係が置かれたが、同年12月には都市建設部として3課が設置され、その後昭和24年には3課が統合されている。したがって瓦礫等の片付けは、甲府市が戦災復興局を設置した昭和20年9月から22年12月までの間、とくに21年3月以降に本格的に行われたとみられる。

空襲による焼失地域内で行われている各地点の発掘調査では、今回のような生々しい資料が多量に出土した調査例はあまりないようだ。被災した焼土面はよく見出されるが、今回のように大規模な捨て場として廃棄遺物がまとまって検出されることはない。

空襲後の廃棄物を集積して埋め立てのために利用した、という行為の結果を示すもので、この調査地点を中心とする限定的な特殊な状況といえる。

出土遺物の割合などを検討することができなかつたが、被熱で赤く変色した屋根瓦が目立つほか、溶けた一升瓶や、山梨県の「山」マークが入った県庁の軒瓦、ビール瓶などのガラス瓶、薬瓶、化粧瓶、統制食器類、植木鉢、表札、磁器製おろし金などのガラス・陶磁器類、何らかの機械、自転車などの部品、鉄かぶとの鉄類、建物のタイル類、工場で生産された何らかの部品の集積、店先に置かれていたと思われる水晶の結晶、洗面器や弁当箱などのホーロー挽きの製品、竈で用いられた省エネのための敷輪、セルロイド製の人形の首、歯ブラシなど、あらゆるもののが集積されている。

本報告ではそれらのうちの一部を示すにとどまった

が、そもそも遺物取り上げ時点でどのように対処したらよいのか戸惑ったのは事実である。今回の本調査に際して市教育委員会が提示した調査仕様では、昭和時代の遺構、遺物については調査対象とする必要性についての指示がなく、対象にしなくてもよい、という方針であったが、このような出土遺物が得られる機会はそうあるものではないことから、甲府市にとって空襲の悲劇を物語る第一級の資料群ではないか、という判断により、特徴的な資料を一部回収することとした。

調査区脇に建つ長田組土木株式会社(調査当時)は、県内では土木工事会社の老舗のひとつで、明治38年に長田組として発足、昭和13年1月に合名会社長田組、昭和24年2月に長田組工友株式会社、昭和27年に長田組土木株式会社となって現在に至っている。終戦当時の状況については聞き取りで明らかにできなかったが、市内中心部の瓦礫を今回調査した敷地内に集積し、盛り土として地盤造成を行ったのは、戦災後の復興整理に長田組が関わっていたからと推測しておきたい。調査区壁面の断面観察では、二の堀に向って西側から東側へと瓦礫を堆積した状況を見ることができた。

戦災資料の取り上げについては、考古学的な調査に加えて史資料調査、聞き取り等の手段を駆使すべきであった。甲府市内では今後もこうした現場に遭遇することがあるかと思われるが、現場でどのような調査をすべきか、調査理念と目的を明確にし、実際の調査マニュアルを確立すべきであろう。また今回、回収した戦災遺物については博物館や資料館、学校教育等で有效地に活用されることが期待される。

最後に、この調査にご理解、ご協力を賜った社団法人 山梨労働者医療協会および関係者の皆様、調査に参加された方々には心より感謝申し上げます。

参考文献

- 甲府市役所 1949 『甲府市制六十周年誌』
甲府市 1974 『甲府空襲の記録』
甲府市役所 1993 『甲府市史 通史編 第四巻 現代』
渡辺ますみ 2003 「高田城下鍋屋町遺跡」『上越市史叢書8 考古一中・近世資料一』上越市史専門委員会考古部会
山梨県教育委員会ほか 2004 『甲府城下町遺跡—甲府駅周辺 土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書一』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215集
甲府市教育委員会・(財)山梨文化財研究所 2007 『甲府城下町遺跡IV—集会所建設工事に伴う発掘調査報告書一』
甲府市文化財調査報告 39
山梨県教育委員会 2008 『甲府城下町遺跡(北口県有地)一 北口県有地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第258集